

## 第39回大会シンポジウム報告

て、挑戦的行動の生起に関する変数を正確に同定する。特に音への過敏性、便秘やアトピーの影響が強いことがわかった。

第3期：生活を整える（2000年7月～2001年3月）  
微視的アプローチ中心…挑戦的行動の軽減と適応行動の形成。

第4期：地域への統合（2001年1月～）巨視的アプローチ中心…改善しにくい行動をもちながら援助付き地域生活を作る（QOLの向上）。現在3期途中から徐々に4期の課題を取り入れている。

## 5. 指定討論（小林重雄）

(1) 予防的視点としてself-manegementが成人期までにできているかどうか重要ではないか？

奥田：処遇事業終了後には一般の施設に戻ることが前提となるためself-manegementは重要と考え、行動契約法等を用いて試みている。

佐藤：「完全」self-manegementではなく、「援助付き」self-manegementが必要と考える。

野口：単発的行動ではなく複合的な行動の連鎖を形成することがself-manegementにつながると考える。

(2) 「意味」を考えるだけで行動障害は減るのか？「意味」をどのような根拠に基づいて把握し、その妥当性をどのように検証するのか？

佐藤：「実証」科学と「解釈」科学の違いであり、本実践は解釈科学に基づき、解釈が重要となる。

園山：解釈の妥当性については、実際には記録やカンファレンスを行うことによって、「意味」解釈の適否を随時検討しているのではないか。

## 6. 全体討論

筑波大学の佐藤氏より各話題提供者に質問があった。奥田氏に対して：発表者の立場は？ほかの職員にどのような指導を行ったか？（奥田：現在はまだ発表者一人で行っている段階であり、成功したことをほかの職員に伝えている段階である）。佐藤氏に対して：コンサルテーションにおいて解釈をどう伝えたか？（佐藤：カンファレンスを通して、職員が解釈したものとは別の見方もあることを伝え、解釈をより正確にしていくようにした）。野口氏に対して：職員の共通性（手続きの違いをなくす）を作り出すためにどうしているか？（野口：基本的に手続きを文書化し、ミーティングで確認する作業をしている。十分できない職員については担当対象者を変更する）。

参加者は若い会員を中心に約50名で、特に方略の

実際とその実証性を巡って熱い討論がなされた。

（園山繁樹）

## 自主シンポジウム 13

## スクリプトを用いた言語・コミュニケーションの指導法は発達臨床にどのような貢献をしてきたか

企画者	関戸 英紀（横浜国立大学）
	長崎 勤（筑波大学）
	佐竹 真次（山形県立保健医療大学）
司会者	長澤 正樹（新潟大学）
話題提供者	松田 信夫（山口大学）
	宮崎 眞（東京都立村山養護学校）
	関戸 英紀（横浜国際大学）
指定討論者	長崎 勤（筑波大学）
	佐竹 真次（山形県立保健医療大学）

## 1. 企画の趣旨

発達障害児の言語・コミュニケーションの指導法として、スクリプトを用いた指導法が長崎(1991)によって報告されて以来、早10年が経過した。その間、学校をはじめとするさまざまな臨床現場において多くの研究・実践が蓄積されてきた。そこで、本シンポジウムでは、この10年間を振り返り、この指導法が臨床現場にどのような貢献をしてきたか、また現在どのような課題を内容しているかについて、フロアの参加者とともに検討・整理をしていきたい。

## 2. 発表

## (1) 松田信夫

自閉症児を対象とした当指導の効果について下記の内容が示唆された。(1) 文脈理解をベースとしつつ学習活動に見通しをもてるようになることは、児童が他者へのかかわり方を変容させる前提条件になると推察されたが、当指導は児童に見通しをもたせる上で有効であった。(2) 指導者は以下4点の認識を深めることができた。①自発的応答を待つ重要性、②課題と指導の手だてを明確にする重要性、③意欲を喚起する題材を準備する重要性、④日常生活とのギャップの少ない学習場面を準備する重要性、(3) 当指導では対象児の変容を行動レベルで記録するため、保護者に変容の具体を伝えやすい。変容の事実は保護者の喜びと励みと

## 第39回大会シンポジウム報告

なり、育児や学級行事参加への母親の前向きな取り組みを促した。

## (2) 宮崎 真

学校生活には多様なルーティンがある。このルーティンを幅広く活用する手続きがあれば、さらに効果的な指導が可能となる。今回、まず現状を把握するため、発表された共同行為ルーティンの指導をA養護学校小学部の教育課程に適用した。その結果、共同行為ルーティンが可能なのは、ことば・数の指導を目的とするグループ学習、次に日常生活の指導であった。生活単元学習、音楽などのその他の教科、特別活動の授業では難しかった。学校生活に含まれる多様なルーティンを最大限活用し、コミュニケーション指導を行うためにはそれぞれのルーティンの特徴を理解し、補い合う手続きが必要がある。そのために共同行為ルーティンの評定表を提案した。

## (3) 関戸英紀

よく出会う行為の系列を「ルーティン」と呼び、ルーティンがその人の知識となったときに「スクリプト」と呼ぶ。このルーティンを獲得するということは、単に言語・非言語を問わず行為の系列を機械的に再現するだけでなく、「その意味や伝達意図を理解する」という側面ももつ。ここが、行動連鎖法との違いであり、それゆえに般化や応用がなされやすいと考えられる。それでは、このスクリプトの獲得をどのように評価すればよいのであろうか。その指標として、1) 対象児が自発的に示す適切な言語行動のバリエーション、2) 獲得した言語行動の日常場面での般化、3) ルーティンの一部の行動を直接的な指導をしないでプロンプトとしておき、それらが自発的に表出されるか否か、を提案し、事例をあげて検討した。

## 3. 指定討論

## (1) 佐竹真次

スクリプトの習慣性の大切さを、4つのレベルを示して説明した。レベル1：知らないレベル、レベル2：知っているだけのレベル、レベル3：やればできるレベル（普通の人々のスクリプトはここ）、レベル4：いつもやっているレベル（スムーズに機能するスクリプトはここ）。また、スクリプト指導のメリットを7つ述べた。

## (2) 長崎 勤

子どもに対しては、①言語・認知学習、②コミュニケーション、社会・情動の発達支援の場としてのスクリプトの貢献は大きい。もう一点は、教師・指導者・

保護者間の連携のツールとしてのスクリプトの貢献である。個別教育計画から授業づくりへの媒介（インターフェース）として、また、自立活動部と母学級担任、通級指導教室担任と通常学級担任、学級と家庭とを具体的なスクリプトによって情報を共有し、支援方法を一致させる結ぶインターフェースとしての役割が重要である。

## (3) 指定討論者から発表者への質問

## ①松田の発表への質問

指導した教師が「待つ」ことの重要性を認識したというが、コンサルテーションによる効果かそれとも体験したことによる効果か（佐竹）。それに対して次の回答を得た。指導する教師は4段階のプロンプトを机に貼り、「待つ」ことを意識した。また、心の中で5つ数えることを指導した。こういう体験を通して「待つ」ことの意義を認識した。

現場の教師がこのような緻密な計画を立て評価することは大変な作業であるが、どのようにコンサルテーションしたか（長崎）。それに対して、この教師は対象児童が1年生のときに大学に長期研修した。時間的な余裕があったからできたと思うと回答した。

## ②宮崎の発表への質問

保護者に対してルーティンやかかわり方を紹介したか。また、その場合保護者も取り組んだか（佐竹）。それに対して次の回答を得た。指導の必要性、指導計画、結果を常に保護者に伝えた。保護者も指導への期待が大きかった。保護者も一緒に取り組み、経過を連絡帳で交換できた。

スクリプトによる指導を行う場合、記録、評価、反省などが必要である。ほかにどんな専門性が必要だと思うか（長崎）。それに対して、スクリプト指導の基本的な指導技法をまず身につける必要性を強調した。

## ③関戸の発表への質問

対象時が買ったものを「いただきます」を言わずに食べたことは、いわゆる「アドリブ」として評価できるが、社会的妥当性として問題があるのではないかと（佐竹）。それに対して、「アドリブ」として大目に見たが、後に教育的な指導を行ったと解答した。

スクリプトの獲得には、たとえば佐竹が示したスクリプト習得のレベルが考えられるが、その場合どのように評価するか（長崎）。それに対して、このことは大きな問題であり、基礎研究の実施など今後の課題といえると回答した。

## (4) フロアからの質問

自閉症の指導法として有名な TEACCH とスクリ

## 第39回大会シンポジウム報告

プトによる指導との違いについて教えてほしいという質問が、フロアからあった。それに対して「TEACCHについて十分な知見があるわけではない」と前置きをし、以下の通り回答した。スクリプトによる指導は場面に適応させることが目的ではない。要求するだけでなく、活動自体を楽しみ、コミュニケーションを豊かにすることを大切にしている（佐竹）。TEACCHは日本で正しくとらえられていないことがあると感じる。TEACCHは繰り返しや共有を強調しないのではないか。スクリプトによる指導では共同行為を重視し、愛着や相手との相互交渉を大切にしている（長崎）。

（長澤正樹）

## 自主シンポジウム 14

## 自閉症児への特別支援教育の在り方を考える (1)

—特に高機能自閉症、アスペルガー症候群への教育的対応について—

企画者 東條 吉邦（国立特殊教育総合研究所）  
 司会者 谷口 清（東京慈恵会医科大学）  
 東條 吉邦（国立特殊教育総合研究所）  
 話題提供者 東條 吉邦（国立特殊教育総合研究所）  
 市川 宏伸（東京都立梅ヶ丘病院）  
 高橋 和子（大阪教育大学非常勤講師）  
 廣瀬由美子（国立特殊教育総合研究所）  
 谷口 清（東京慈恵会医科大学）

### 1. 企画趣旨

自閉症児への教育的対応を主目的として開始された情緒障害教育は、その対象となる児童生徒の障害が多様化し、教育の枠組みを見直す必要性が高まっている。平成12年5月に文部省に設置された「21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議」でも、自閉症児教育の改善に関して多くの発言がなされ、最終報告で、次のような提言がなされた。①通常の学級に在籍する高機能自閉症児等の実態把握を目的とした全国調査を行い、判断基準や効果的な指導方法等について検討すること。②自閉症児には心因性の情緒障害児とは異なる教育的枠組みが必要であること。③知的障害を伴う自閉症児の場合、知的障害のみを有する児童生徒とは異なる教育的対応が必要であること。

これらを踏まえ、本シンポジウムでは、自閉症児へ

の特別支援教育の現状と今後の課題について議論した。

### 2. 話題提供

企画趣旨説明の後、企画者（東條吉邦）が、「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」での提言の内容を解説し、①自閉スペクトラム障害の症状形成過程、②通常の学級に在籍する自閉スペクトラムの児童生徒への支援システムの試案、③支援方法の具体例などについて述べた。その後、話題提供者による報告と質疑が行われた。概要は、次の通りである。

1) 市川宏伸：医療から見た高機能自閉症、アスペルガー症候群

近年、知的障害を伴わない広汎性発達障害（高機能自閉性障害やアスペルガー障害）が注目を浴びており、最近のいくつかの症例を報告した。

知的障害がないため、小学校高学年以降になり社会的不適応をきたしてから気付かれることが珍しくない。思春期以降に幻覚や妄想を伴う精神分裂病様の状態を示したり、気分の変動が激しくなる気分障害様の状態を呈することもある。相手の気持ちを理解できないため、周囲との軋轢が強まったり、引きこもり気味になり、教育や就労上での挫折を繰り返す症例が多く見受けられる。これは、自己評価が低下して、被害的・妄想的になったり、気分の変動が目立つ結果と考えられる。一人一人の考え方や行動様式を理解して、適切な対応や環境調整を行うことが大切である。

2) 高橋和子：高機能自閉症児と親の教育支援に対するニーズ

大阪を中心に活動している高機能広汎性発達障害児親子の会（全員、高機能広汎性発達障害との診断を得ている）を対象に、教育ニーズに対するアンケート調査を行い（有効回答数31、有効回答率約82%）、高機能広汎性発達障害児と親の教育支援に対するニーズについて分析した。

まず、子どもがこれまでに受けてきた援助実態について、次の2点について検討した。1点目の高機能広汎性発達障害の診断の時期と個々の問題点の特徴との関係については、診断時期が早期であるほど、何らかの援助を受けることができ、二次障害を起こさずにすんでいた。他方、自閉の症状が軽微にもかかわらず、診断が中学生以降になった場合は、二次障害など、問題がより困難になっていた。2点目の援助システムの有無と援助の実態については、就学前には、約2/3の者が相談機関を訪れ、約1/2の者が何らかの療育を受